



第10回全国ホームタウンサミット 参加報告

ホームタウンはつながりが作る
~ 「ありがとう」のキャッチボール

市民スポーツボランティア SV2004

2009年11月14日(土) 基調講演・座談会・分科会・親睦会

11月15日(日) 地域活動報告・分科会報告・次回開催地決定

開催地 新潟 主催 スポーツで幸せなまちづくり実行委員会

11月14日

誇れるものなんて何もないんです。と市長は言いました。しかし、その言葉の陰に自信と誇りを感じたのは気のせいでしょうか。それほど今回のサミットと新潟のまちは元気にあふれていました。

初日、新潟駅に隣接するホテルの会場には続々と参加者がやってきました。懐かしい顔、初めての顔、受付はさながら同窓会の場となりました。その中でスーツを着た若い人々が忙しげに準備している姿が目立ちます。主催するスポーツで幸せなまちづくり実行委員会のメンバーなののでしょうか。さまざまな団体が参加している組織だけに事前に分担につきしっかり打合せされていることを感じます。

この全国ホームタウンサミットは1999年に平塚市で第1回が開催されました。当時メインスポンサーの撤退によってクラブが消滅するかもしれないという危機的な状況の中で開催されてから今回で10回目の開催となります。その記念大会という意味もあり基調講演は湘南ベルマーレの真壁社長が登壇しました。

基調講演 地域密着とクラブ経営優先順位
(株)湘南ベルマーレ代表取締役 真壁 潔 氏

真壁氏の講演は、今だからお話しできるのですがというコメントから始まりました。1999年メインスポンサーの撤退により横浜フリューゲルスが消滅したさいに、同じ課題を抱えてJリーグ加盟の取り下げ(事実上のチーム廃止)の申請をしたのが、当時のベルマーレ平塚、現在の湘南ベルマーレでした。しかし、続けてのクラブの消滅は社会的な影響も大きいということで受理されず、申請までの期間を延長してチームはJリーグにとどまる事になるのです。その過程において、より地域とのかかわりを強めるために開催されたのが第1回全国ホームタウンサミットだったといえます。

サミットへの提言としてはぜひ全国の人々の手でバトンをしていって積極的な情報交換の場になればいいのでは、ということでした。ベルマーレの活動は100年構想に基づきリーグの助成制度を活用して陸上・ビーチバレー・バレーボール・スイミング・トライアスロン・フリーグなど様々なスポーツを行っているということで、総合型スポーツクラブをめざしているのです。また、スポーツ施設をもたない会社のため指定管理制度により現在5ヶ所の施設を受託しており、これにより空いている時間を使って地域のための活動ができるといえます。これからチーム数も増え、J2とJFLの入れ替え



も始まります。その競争の時代ではスタジアムを満員にできないクラブは淘汰されるはずであり、生き残るためにはプロの経営・チーム運営・選手だけではなく多くの人に考え、声を出してほしいということでした。一緒に支える為の力がサミットから生まれて欲しいと思います。



座談会 スポーツでもっと幸せな国に！

その後の座談会は篠田新潟市長のコーディネート、真壁さんとアルビレックス新潟社長の田村さんのお話でした。新潟は情報量が全国的には多い割りに地震や拉致事件、原発など暗いものが多かった中で、明るい話題となったアルビレックス新潟の奮闘には感謝したいとする市長のコメントをうけて、田村さんからは従来は行政と一緒にやるのが少なかったが、サッカーの育成・普及によりサポーター、ボランティア、家族のつながりが広がっているという報告があり、真壁さんからはベルマーレは新潟からいろいろ学んでいるというコメントがありました。

また、篠田市長からのどうすれば感動が生まれスタジアムに観客動員ができるかという質問に対し、真壁社長はそれはJリーグの大きなテーマとしたうえで、地道に積み上げて入る努力をしてきたところが現在観客が多いとし、メディアとの連携の重要性にも触れました。田村さんからはクラブを作るのはクラブだけではなく、サポーター、企業、自治体と一緒に作る事が大切であり、そのため今年のスローガンを「change・challenge・communication」にしたこと、真壁さんからは全員が仲間であり一緒に解決する姿勢を大切にしたいというメッセージがありました。

つながりを作る事、ホームタウンとはそこに住む全ての人が当事者である「つながり」のあるまちであり、さまざまな活動はその原点を忘れずにやることなのでしょう。

コーディネーター 新潟市長 篠田 昭 氏

パネラー Jリーグ監事 真壁 潔 氏 ・(株)アルビレックス新潟代表取締役社長 田村 貢 氏

分科会 会場 新潟市総合福祉会館



会場を新潟市総合福祉会館に移し、3つの分科会が開催されました。第1分科会はクラブがまちづくりに果たす役割をテーマとし、第2分科会はクラブを支える後援会をはじめとする組織作りについて、それぞれ具体的な事例をまじえて意見交換があり、第3分科会では「ボランティア活動の魅力作り」について参加者が班に分かれて話し合いました。

前段では東京マラソンのボランティア活動の紹介や、今年韓国で開催された日韓オールスターサッカーのために韓国を訪問した新潟のボランティアから、交流や活動の報告がありました。

ボランティア活動の魅力とは・・・、全国から参加した人々との意見交換は最初はきごちなく感じられましたが、やがて順番に各地の様子が語られ大きな違いがないとわかると、ボランティアの待遇、ボランティア活動の楽しさ、ボランティアを増やすためのアイデア。

実際に工夫し取組んでいるからこそその事例がいろいろと紹介されました。結局時間が思いのほか短く結論はだせませんでした。が懇親会につながる交流がはかられた貴重な時間となりました。





懇親会 話は尽きない!

懇親会 19:00~21:00

再びコンファレンスセンター新潟に会場を移して開催された懇親会は、これとこの後の二次会を楽しみに参加する人もいたほどで、サミットのメインイベントともいえます。立食で飲食を楽しみながらあちこみで名刺交換や情報交換の花が咲きました。

めずらしかったのはアルビレックス新潟のスポンサーから新潟名産ともいえる「柿の種」の提供があったり、年々参加者紹介に備えてパフォーマンスを用意してくる地域が増えてきたことでしょうか。



さて、楽しい時間はあっという間に過ぎます。懇親会が終了すると参加は新潟のあちこちに分散し遅い人で深夜2時ごろまで語り飲み食べたといえます。気温は低めでしたがほっとな夜になりました。

11月15日

サミット二日目はやや風の強い一日となりました。ホテルから会場に向かう間その風に目を覚まされたのは私だけだったでしょうか。参加者の多くは日付が変わるまで飲み語りあった様子ですので丁度いい刺激だったかもしれません。この日は天皇杯の4回戦が各地で開催され、そのために早朝に新潟を離れた仲間も多かったようです。残った私たちは30分以上前に会場に到着したのですが、既に多くのスタッフが準備態勢に就いており頭が下げる思いでした。

地域活動報告会

静岡 「サッカーをキーワードにしたまちづくりからサッカー王国の継承へ」
 (財)日本サッカー協会理事 綾部 美知枝 氏



前静岡市生活文化スポーツ部参与兼サッカーのまち推進室長でもあった綾部さんは、自身のサッカーとの関わりや、専門家ではなかったものの親としてサッカーを通じて子供のマナーアップに取り組んで来たことを報告してくれました。

今こそサッカー王国静岡ですが、清水のサッカーのはじまりは学校の校庭でボール遊びが禁止されていた1956年に一人の教師が校則を破り、子供にサッカーをさせたことがきっかけというエピソードは、その際に学校にクレームをつけたメンバーの一人が綾部さんであったと同様、意外という他はありません。

やがて清水では子供達のサッカーが盛んになるとともに、父親や母親のチームも誕生、地域の学校にナイター照明付きの芝の校庭が整備されるとともに拡大し、現在では「全国少年少女草サッカー大会」に全国から290チームが参加するほどになったそうです。

やがて多くのサッカープレイヤーを排出し、地元清水エスパルスという名門クラブを抱えることになりましたが、現在は「サッカーフレンドシティ」をめざし、「ひとづくり」「まちづくり」「交流」をテーマとした活動が行われているとのことでした。

地域活動報告会 NO. 2
新潟 「スポーツのまちへ！ 新潟の足跡」
アルビレックス新潟 取締役事業本部長
小山 直久 氏

報告の二番目は地元アルビレックス新潟の小山さんが登壇、クラブの創設時から関わっているからこそその苦労話しが紹介されました。

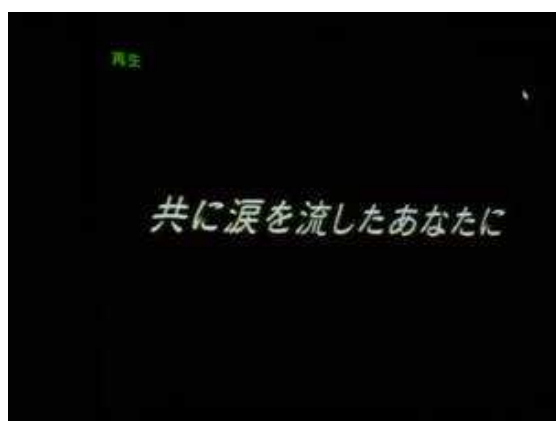
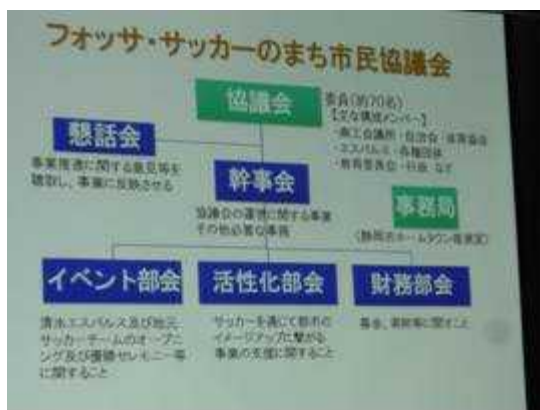
今でこそJリーグ屈指の観客動員力を誇り、他クラブの見本となっているアルビレックスですが誕生時は少ないスタッフで考えて実行した、招待券配付で町内会を訪問しても断られることも多かったという逸話では、そのごサッカーの楽しさが理解されるとともに地域の人のクラブ理解も大きく改善されたといえます。また、新潟にはたくさんのサポーターや支援者がいてその言葉に常に励まされてきたともいいます。小山さんがであった人々に共通するもの、それは当事者意識であったように思います。クラブやチームとの関係を別にするのではなく、自らと一体のものとして考え行動すること、だからこそここに本当のホームタウンが作られていくのでしょうか。小山さんはいいいます、「目に見えない人と人との心のつながりをつくることこそ、地域活動の根本ではないか」と。

しかし、一方であまりにもピークを早く迎えたがために近年観客の減少傾向も見られ、そのために改めて原点を見つめ理念の普及に取り組んでいるといえます。サミットの主体である「スポーツで幸せなまちづくり実行委員会」はその中核になる可能性が高いようです。

そのご、チアリーダーの活動紹介のあと小山さんが紹介されたふたつの映像は実に刺激的であり、心に響くものでした。

一本目はスポンサーとクラブ、サポーターの関係を一体にしたケースであり「スポンサーデー」の見方を大きく変えるものでした。

タイトルはローソンサンクスデー、タイトルだけ見ればどこのクラブでもありそうなものですが、紹介された画像では新潟県内のローソンの店主・従業員約200人がローソンファミリーとしてピッチに並ぶ所から始まります。ピッチ上に立ったローソンの代表はマイクを手に切々と熱くサポーターに語りかけます。「新潟とはアルビのことです」、地震のあったそのときアルビレックスによってどれほど勇気づけられたか、自分たちがどれほどクラブ・チームを応援しているか。ふり絞るようなそのメッセージはやがてスタジアムをひとつにするのです。そして突然沸き起こるローソンコール。その姿は単なるスポンサーとクラブの関係、スポンサーとサポーターの関係を超えていました。

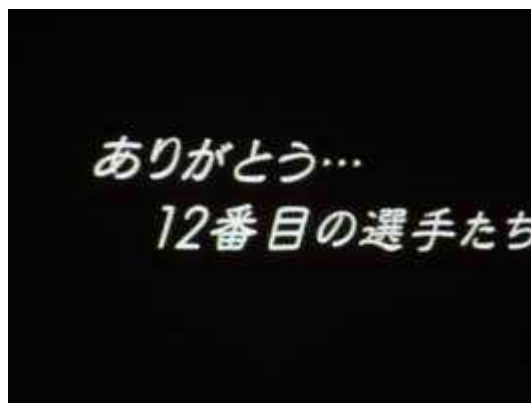


二本目はチームが最も苦しいときに、スポンサーとサポーターの手で作られたドラマの紹介でした。昇格して初めての2004年、チームは9月までホームで勝利がありませんでした。当然サポーターとの関係も悪化が見込まれ、クラブとしては苦慮したといえます。考えてみれば選手・監督コーチはもちろん、

クラブもスポンサーもそしてサポーターも誰もが勝利を願っているのです。誰かが誰かを非難し互いに傷つけあっても、むしろ勝利へのモチベーションは下がるばかりです。全ての人々が当事者である。そんな気持ちから生まれたのが「選手へのラブレター」という企画でした。

2004年9月23日、寄せられたある母親からの手紙がサポーターが見つめる中、ピッチで読み上げられました。小さな男の子の母からの手紙は鈴木慎吾選手への感謝の言葉で始まります。言葉を話すことがなかった子供が、アルビレックス、とりわけ鈴木選手が好きで好きでいつも応援していました。そして、ある日、「慎吾」とことばを話したのです。そのときの驚き、そして喜び、その感謝を手紙は伝えます。そのあと続いて前年の昇格からのサポーターへの感謝と鈴木選手からのメッセージがビジョンに映し出されます。その中でいつも応援してくれることへの感謝とともに、今日のゲームでの活躍を誓うのですが、その日のゲームで、鈴木選手は1ゴール、1アシストの大活躍をし見事ホーム初勝利をサポーターにプレゼントしました。

紹介された映像は最後にスタンドで応援する男の子を映し出します。最後にポツリと口にする「慎吾」ということは、サポーターの役割はチームを選手を応援し勝利につなげるためにある、という原点を思い出させてくれます。そして最後に小さくスポンサー名が、この企画がひとつのスポンサーの支援を受けていたことを教えてくれます。全ては勝利のために、この年、アルビレックスは残りのホーム5試合中4試合を勝利し見事残留を果たしました。



分科会報告

第1分科会 「スポーツとまちづくり」

「人と人がつながって人が喜ぶまちづくりにつながる」

第2分科会 「クラブを支える組織作り」

「入ってみたいと思える組織づくり」

第3分科会 「ボランティア活動の魅力作り」

柏の橋本さん、磐田の鈴木さんから意見交換の様子を報告

次回開催地報告

2010年は6月に「甲府市」にて開催



新潟はひたすらやさしかった。サミットのためにさまざまな準備をする精神は、きっと地域やそこにあるスポーツ文化の発展にもつながると思います。そして出会った多くの仲間たちが持ち帰った「思い」もまた・・・